

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	渡邊 知行
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	環情博甲第2209号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位授与の根拠	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻
学位論文題目	障害者グループホームにおける世話人の支援に関する研究 —「被支援者を個々に捉える調査デザイン」を用いて—
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 安藤孝敏 横浜国立大学 教授 志田基与師 横浜国立大学 教授 周佐喜和 横浜国立大学 准教授 長谷部英一 相模女子大学 准教授 松崎吉之助

論文及び審査結果の要旨

障害者グループホームの現場実践を担う世話人には高い専門性が必要であると指摘されているにもかかわらず、世話人が質の高い支援を提供するための方策に関する研究はきわめて少ない。本学位論文は、障害者グループホームにおける世話人の支援に焦点を当て、質の高い支援を提供するための要因を明らかにするために、調査方法論を含めて詳細に検討したものである。

序論と第1章では、ノーマライゼーションの影響を受けて広がった日本における障害者グループホームの変遷が制度的な側面を含めて整理された。次に、グループホームの現場実践を担う世話人の現状が詳細に検討され、論文の目的が設定された。

第2章では、障害者グループホームにおける世話人の支援に関する研究論文のレビューを行い、知見が整理された。その結果、世話人の支援に関して、知見の質・量ともに不足していることが明らかになった。この原因は取得しているデータの質にあることから、新たな調査デザインが提案された。すなわち、世話人と被支援者である利用者をペアで捉えて、そのペア間で取り交わされる支援に関するデータを取得できる「被支援者を個々に捉える調査デザイン」である。この調査デザインでは、世話人と利用者1対1の支援等に関する情報に加えて、世話人と利用者それぞれの個人属性を取得できることが特徴である。その結果、得られるデータから「どのような世話人が、どのような利用者に、どのような支援を」という分析枠組みが可能となる。なお、個人情報の取り扱いに関する課題については、匿名化リストを使い対応した。

第3章では、「被支援者を個々に捉える調査デザイン」を用いて、世話人が行う20項目からなる支援ニーズを把握するアンケート調査を行った。その結果、47名の世話人と65名の利用者から308ケースのデータを取得し、それぞれの基本属性と支援ニーズの分布を確認した。

第4章では、ケースデータを用いて、障害程度を軽度・重度、障害種別を知的・精神に分類して支援ニーズについて検討した。その結果、利用者の障害程度が重いほど、世話人は利用者に対して支援が必要と認識していることが明らかになった。次に、支援の因子構造を明らかにして機能性について検討したところ、軽度障害者に対する支援は「日常生活支援」、「社会参加支援」、「相談援助支援」、「見守り支援」、重度障害者に対する支援は「日常生活支援」、「社会参加支援」、「相談援助支援」から構成されていることが示された。障害程度と障害種別の詳細な分析では、軽度精神障害者は軽度知的障害者に比べて自立度が高いこと、重度知的障害者は重度精神障害者に比べて日常生活や相談援助において極めて手厚い支援が必要であることが指摘でき、利用者の障害程度や障害種別が異なれば、必要とする支援の多寡に加え、支援を構成する機能も異なることが明らか

にできた。

第5章では、世話人の基本属性に焦点を当て、「国家資格」と「実務経験」が支援ニーズに及ぼす影響について検討した。その結果、世話人が国家資格を保有することで支援ニーズを的確に把握するためのアドバンテージとならないことが明らかになった。一方で、軽度障害者において、実務経験が長い世話人ほど支援ニーズを的確に把握していた。特に、軽度精神障害者のケースでは、「日常生活支援」、「社会参加支援」、「相談援助支援」、「見守り支援」の全ての支援ニーズにおいて有意差があったことから、世話人の実務経験が極めて重要な要因であることが明らかになった。国家資格を保有していない等の非専門職が多くを占める世話人体制であっても、離職率や勤続年数にも注目していくことで質の高い支援が提供できる体制に近づき、その結果、利用者の生活の質も向上していくと考えられた。

第6章では、障害者グループホームにおける世話人の支援に焦点を当てた一連の研究から得られた成果とその意義が論じられた。利用者の障害程度や障害種別が異なれば、必要とする支援の多寡に加え、支援を構成する機能も異なること、世話人の実務経験が支援ニーズの把握に関係しているという知見は、「被支援者を個々に捉える調査デザイン」でデータを取得したから実現できたことであり、調査方法論においても重要な貢献である。今後、個別処遇を原則としている世話人の支援に関する研究には極めて有用な方法であると考えられた。

本学位論文は、障害者グループホームにおける世話人の支援に焦点を当て、新たな調査方法の提案を含めて、質の高い支援を提供するための複数の要因について明らかにできた点に学術的に大きな貢献が認められる。審査委員による本学位論文の内容に関する質疑に対して適切に回答できたこと、その他の学力・業績と合わせ、専攻の学位審査の基準に照らして博士の学位の授与に十分であると結論し、審査員は全員一致して、博士（学術）学位に値すると判断した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。